

おもいで
あなたの足跡残します

足寄町が開町80年を迎えた昭和63年に、足寄をつくってきたお年寄りたちの「足跡」を残そうと、80歳以上のお年寄りの足型を歩道に敷設したことをきっかけとし、20年経過した現在では、住民や観光客などから採取した約5,700枚の足型を、国道沿いに敷設しています。国道沿いに敷設されていることから、他の町とは違った歩道の情景に目を留める人も多く、現在では、観光客の足型採取の申し込みが地域住民を上回り、また、自分や家族の足型をも見るために足寄町を多くの方が再訪されるなど、これまでの「足寄町の観光＝大自然」だけでなく、「足型」が新たな観光名所になっています。

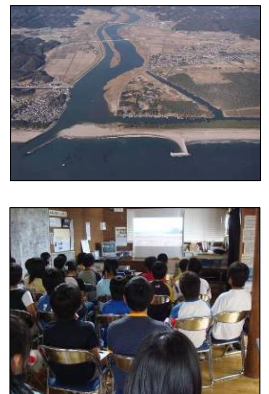
(北海道・足寄町)



のびるちっこうあと
「野蒜築港跡」を活用した地域活動

野蒜築港は、明治政府の殖産興業政策と東北開発の一環として、明治11年に着工され明治17年の台風により計画が挫折しましたが、海運国日本の魁として近代港湾を目指した最初の事業であり、今日の日本の礎ともなった大規模土木事業です。野蒜築港ファンクラブは、この歴史遺産の保全活用に努めるとともに、次世代を担う子ども達に継承していくことを目的に設立され、自分たちの地域遺産「野蒜築港」への理解向上と興味の醸成を図り、地域が誇りを持って推奨する「野蒜築港史跡」を核とした地域づくりが進むことを目的に、見学者への案内ガイドや市内各小学校への出前講座など活動しています。

(宮城県・東松島市)



地域で創る、花いっぱい、トンボの飛び交う 憩いの公園

都立公園を樹林公園として整備する拡張計画に対し、地元の商店街や住民たちが明るい花の公園にしたいと要望したことをきっかけに、地域住民も計画段階から公園づくりに参加し、2,000m²の5つの大きな花壇を持つ花の丘地区が造られました。住民たちで設立した「芦花公園花の丘友の会」によって、業者任せにせず自分たちで植栽の維持管理や清掃を行うほか、「みんなのとんぼ池」「芦花公園自然観察資料館」の管理・整備を実施し、地域の子どもたちや住民のコミュニティ醸成に取り組んでいます。

(東京都・世田谷区)



いのかしらおんしこうえん
都立井の頭恩賜公園（開園100周年に向けての取組み）（東京都・武蔵野市、三鷹市）

井の頭恩賜公園は日本初の郊外型公園として開園し、井の頭池を中心とした豊かな水と緑の貴重な空間が、多くの人々に親しまれており、平成29年に開園100年を迎えます。地元住民、関係団体、行政などが協力しながら、貴重な水と緑の空間を守るとともに、公園を核とした新たな賑わいを創出するための井の頭池クリーン作戦や大道芸人や露店の登録制など様々な地域活動に取り組んでいます。住民の自主的な園内パトロールや、住民参加による公園利用のルール策定・徹底などは新たな公園活用の先進的な取組であり、また、地域住民のコミュニティの形成に大きく貢献しています。



^{べっしょおんせんおおゆ}
別所温泉大湯地区ふれあいロード

雑木や竹やぶに覆われた西川を住民の手によりビオトープとして整備したことをきっかけに、公園や遊歩道の整備、花壇の維持管理など住民のボランティアによって16年にわたり活動を続けています。行政に原材料の支給や道具の貸与をお願いしながら、地区の全戸が参加し地域をあげて、手づくりによる自らの地域づくりに取り組んでいます。地区住民のコミュニケーションが深まるほか、沿道がきれいになったため観光客が立ち寄ることが多くなり、ゴミの不法投棄が少なくなるなど様々な効果があらわれています。

(長野県・上田市)



^{あんまがわ}
流域のみんなで洪水防止 安間川水辺再生まちづくり

住民と行政が協働で取り組んだ治水・利水と環境が調和した安間川河川整備計画の策定をきっかけとして、行政だけでなく住民自らも洪水抑制に取り組む総合治水に取り組んでいます。治水計画の策定に及ぶまでに住民意識も向上し、治水のみならず維持管理や環境保全等多方面にわたり活躍するリーダー的な存在も多数育っています。川づくりからまちづくりへ、ネットワークを活かした新たな治水の仕組みづくりに取り組んでいます。また、地域が治水に積極的に協力することで、河川改修の規模がスリムになるなど、今後の公共事業の先進的な事例といえます。

(静岡県・浜松市)



^{ひがしやま}
なごや東山の森づくり

「なごや東山の森」は東山公園と平和公園からなる国内最大級の都市内緑地であり、市民共有の貴重な財産です。しかし、かつては里山として利用されていた樹林も、近年の都市化の進展とともに荒廃が進み、1980年代頃から市民グループの自発的な活動により、森の保全・育成への取り組みが始まりました。「森を守り育てる」「森と関わる」「森づくりを生かす」をテーマに、毎月1回の定例森づくりや自然観察会などを行い、里山づくりに取り組んでいます。現在では、「なごや東山の森」は都市に残された貴重なみどりであると住民に認知されるようになり、また人と自然が交流する場としての役割を担っています。

(愛知県・名古屋市)



^{みなとがわすいどう}
湊川隧道保存友の会

湊川隧道は、旧湊川の付替えに伴い明治38年に竣工した、我が国初の近代河川トンネルです。平成7年の阪神淡路大震災により被災し、災害復旧事業により新湊川隧道が建設されました。新湊川トンネルの坑門に、湊川隧道の扁額が再利用され、坑門もイメージ復元することで、先人の偉業を後世に伝えていきます。役割を終えた湊川隧道についても、地域の文化を継承する近代土木遺産として保存の機運が高まり、地域住民を中心とする「湊川隧道保存の友の会」が設立され、見学会の開催や会報・パンフレットの発行などを行い、隧道を「地域の魅力資源」として活用しています。

(兵庫県・神戸市)



ししがいけ
獅子ヶ池周辺里山整備・保全事業

獅子ヶ池は、以前は緑溢れる地域住民の憩いの場、また子どもの遊びの場でした。しかし、近年は産業廃棄物の不法投棄の場所と化し、周辺も鬱蒼と茂る荒廃した里山となっていました。平成15年に、獅子ヶ池の荒廃を憂慮した地域住民が立ち上がり、行政との協働でクリーン作戦を展開しました。翌年以降もクリーン作戦を継続しながら、安全・安心の里山整備にも着手し、小中学生から老人まで地域住民全てを巻き込んだ活動を行っています。地域住民の多くの方々の手による里山づくりを行うことにより、地域住民に安全で安心して利用できる憩いの場を創るとともに、世代を越えた地域力の向上に取り組んでいます。

(兵庫県・神戸市)



なかやまだい
中山台コミュニティ美しい自然のなかでの暮らし

地域内の自然法面に群生していたヤシャブシによる花粉・植物アレルギー等の問題が平成6年頃から深刻化し、対策が必要となっていました。しかし、法面を管理する市は財政上の問題から除却できない状況であったため、地元住民が自主的にヤシャブシの伐採と美しい緑化空間の再生に取り組み、「行政だけでも、住民だけでもできないことを共に協力して～」をモットーに官民協働で、住宅地としての魅力ある楽しめる緑地づくりを行っています。1戸あたり100円/年の緑化基金を創設し、安定的な資金確保も行いながら、住民主体の取組を継続しています。

(兵庫県・宝塚市)



かべ
可部駅西口広場の整備をきっかけとしたまちづくり

JR可部駅の駅前広場の整備に際して、地域の顔となるような施設にしたいという地元の想いから「可部夢街道まちづくりの会」を結成し、計画当初から行政と話し合いを重ねました。行政と協働で地域資源である「水」や「鋳物」、「町屋」を活かした広場空間の演出を行い、また、広場内に設置されたモニュメントは、設計から資金集めまで地元が主体となって建立しました。この広場整備がボランティアによる清掃活動や、可部の町並み保存活動につながり、可部駅西口広場整備が「可部のまちづくり」の出発地点になっています。

(広島県・広島市)



くうかい
トレッキング・ザ・空海あいなん

「お接待の心」を大切にし、誰もがお遍路さんに道案内が自然にでき、また子どもから大人までお互いが元気に挨拶することが出来る活力ある地域づくりを实践するため、地域住民が主体となり、遍路道の草刈や整備・補修、トイレの整備・清掃や地域資源の遍路道を活かしたウォーキングイベントを行っています。旧内海村で始まった本取組は、町村合併を機に愛南町（旧5町村）全体に規模を広げ、町内各団体が協力して開催することで、合併新町が一つになるきっかけとなっています。

(愛媛県・愛南町)



平成20年度 手づくり郷土賞（一般部門） [全13選]

(4/4)

いたびつがわ

板櫃川水辺の楽校

(福岡県・北九州市)

板櫃川は昭和28年の西日本大水害を契機に行われた治水事業により、両岸がコンクリートで固められた都市水路となっていました。平成9年に板櫃川や周辺の豊かな緑地などの自然環境を生かしたまちづくりの計画が持ち上がり、既存の河川幅の3倍近くのエリアの水辺空間として平成19年に整備されました。現在では、地域住民主体の「板櫃川水辺の楽校の会」が中心となり、都市の中の貴重な自然環境を引き継いでいくための維持管理や、水辺の楽校を使った地域の祭りや環境教育への活用など、地域の水辺への愛着を持った地域活動を行っています。



平成20年度 手づくり郷土賞（大賞部門） [全2選]

おもてまち

表町の小さな試み ～住民と大学、行政による協働のまちづくり～

(新潟県・長岡市)

栃尾表町の雁木づくりは「手づくりによる持続的なまちづくり」をキーワードに、地元住民・新潟大学工学部・栃尾市（現 長岡市）が協働し、平成9年より減少しつつあった雁木の保存・復元に取り組んでいます。手づくり郷土賞を受賞した平成14年度以降も雁木の保存・復元を継続し、また雁木づくりをきっかけに地域と大学との交流が深まっています。現在は、この活動を基盤として、まちづくり活動の中心となる表町特有の空間構成を有した町屋を改修したコミュニティーセンターや、周辺地域の公園・歩道などの環境整備の計画に発展しています。



りんご並木

(長野県・飯田市)

市街地の7割を消失した大火の復興時に造られた道路の中央分離帯に、昭和28年に中学生がりんご並木を植樹して以来ずっと、土作り、剪定、収穫など全ての管理工程を生徒が行っています。並木の老齢化と車社会の進展もあり、りんご並木は復興のシンボルとして歩車共存のコミュニティ道路として再整備され、翌年の平成12年度に手づくり郷土賞を受賞しました。再整備された後は、多くの地域住民も管理・清掃に参加するなどし、学校と地域を結ぶ協働の場となっています。また、20余の団体が連携する「りんご並木まちづくりネットワーク」が歩行者天国を毎月開催するなどし、市民の交流や憩いの場を形成しています。

